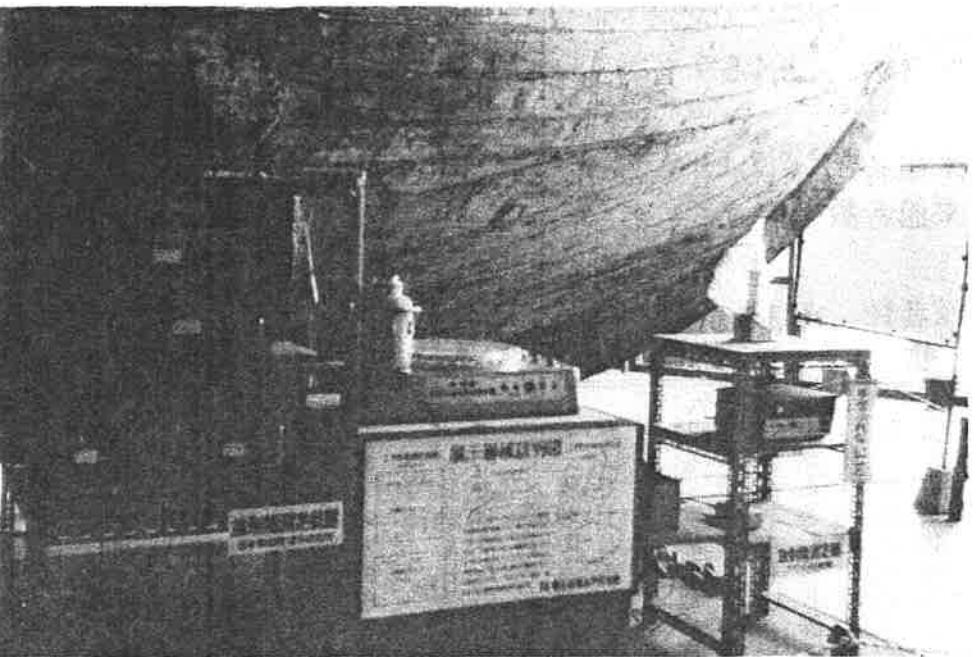


設置された放射能測定器



この写真は、6月の展示会の際、三宅泰雄会長、猿橋勝子評議員、金沢照子
賛助会員の諸先生と、株式会社アロカのご協力を得て、館内に設置した放射能
測定装置です。

一九五〇年九月、最初の原爆映画である「長崎の鐘」(大庭秀雄監督・松竹作品)が製作され从來から、今年で、まる三〇年が経過しました。

この間、今年封切られた「はだしのゲン第三部」まで、外国映画、長編記録映画を含め、三〇本の原爆映画が作られて来ました。

しかし、その中で、時々でも上映される事のある映画は、「純愛物語」「博士の異常な愛情」など、ごく一部にすぎず、他の映画は、配給会社の倉庫に眠つていて、すでにプリントがなく、ネガだけが保存されているたり、洋画の場合は、日本での版権が切れ、まったく見られない状態になつているものもあり、ほとんど活用されていません。

近年、原爆の絵、あるいは原爆写真的展示会が活発に行なわれるようになり、その反響の大

きさとともに、核兵器の脅威を視覚に訴えることの必要性が再認識されはじめてきました。

また先月、広島大学の芝田進午教授が、これまで続けて来られた原爆音楽の再発掘作業を集大成して「ノーモア・ヒロシマ・コンサート」を開催。聴覚に訴える活動を、今後も継続されることです。

こうした時に、総合芸術と言われる映画、とくに、その中でも名画が多いと言われる原爆映画に、もう一度目を向ける必要があるのではないか。戦争を題材にした映画が数百本(もちろん反戦映画は少ないが)あるのに比べれば、原爆のテーマは、まだまだ描き切れていません。その少ない原爆映画さえ充分に活用されていないことは非常に残念だと思います。

これからも新しい映画の制作とともに、古いものをもつと活用すべきだと考えます。

原爆映画三十年に思う

事務局長 鹿田 敏彦

